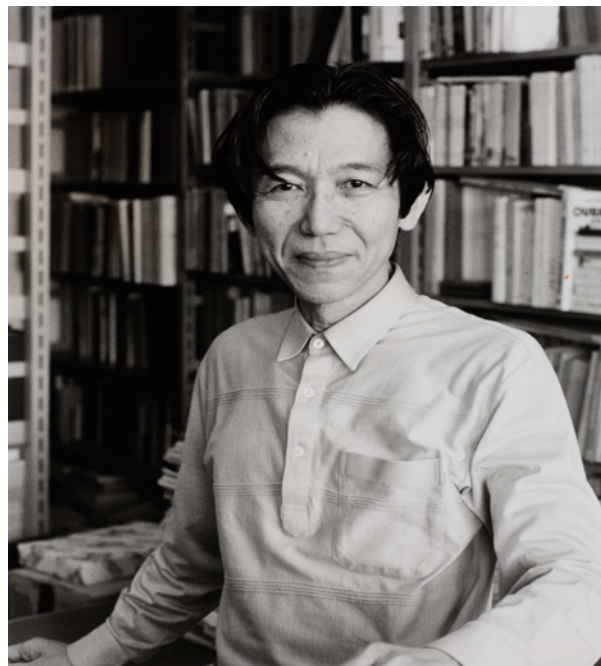


戦後日本を代表する歴史家は何を読んできたのか。

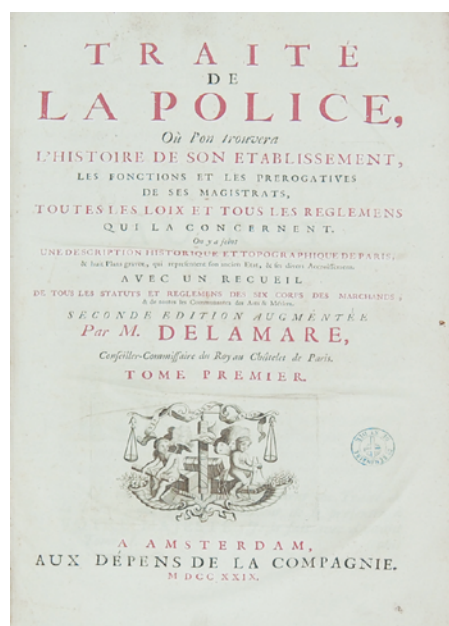
歴史家・二宮宏之氏が私たちのもとを去ってから十年という時が経ちました。この節目の年に開催される本特別展は、筑波大学附属図書館に寄贈された九千冊を超えるその旧蔵洋書から貴重書を中心に、第一級の歴史家の肖像と仕事をご紹介します。フランス絶対王政期の国制史、社会史、そして思想史について珠玉の論攷を数多く発表した二宮氏は、どのように自らを歴史家として鍛え上げていったのでしょうか。

第一部では、二宮氏の日本とフランスに跨る学問上の交流から歴史家の誕生と成長に迫ります。前世紀最大の歴史家のひとり・ブロックへの憧憬、日本の師匠・高橋幸八郎とフランスの師匠・ムーヴレによる薫陶、ソブールやグーベールらとの邂逅、そしてルゴフ、デイヨン、ビュルギエールらとの友情……歴史家は、時代や人間と向き合うことで真の歴史家に変貌していきます。その軌跡を献呈本などから追います。

第二部では、歴史家がその仕事を練り上げていく過程で実際に繙いた原典より、十六世紀から十八世紀にかけてフランス、イギリス、そしてオランダで刊行された王令・法令集等の書物を中心に展示します。「王の儀礼」といった象徴的・抽象的・非日常的次元における権力の行使と、警察機構といった現実的・具体的・日常的次元における権力の行使を両極にとり、両次元を橋渡しする中間的事象として官僚機構などの社会的結合をおいたとき、往時のフランス社会はどのような姿を私たちに見せるでしょうか。また、そういった権力への反逆としてフランス・ブルターニュ地方の「印紙税一揆」に代表される農民叛乱やフランス大革命を取り上げたとき、当時のフランス人はどのような振舞いを私たちに見せるでしょうか。

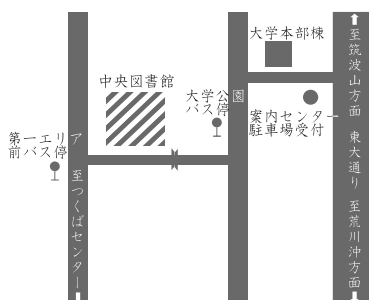


二宮宏之氏（東京外国語大学研究室にて、1994年頃撮影）



ドラマール『ポリス提要』標題紙（特別出展）

ロワゾー『官職論ならびに権力論、身分論』（パリ、1613年）、ゴドフロワ父子『フランス儀典書』（パリ、1649年）、ドラマール『ポリス提要』（アムステルダム、1729年；パリ、1738年）、ドゥリ『王国年鑑—1789年版』（パリ、1789年）、ネッケル『フランス革命論』（1796年）といった書物とともに見ていきます。



【つくばエクスプレス】つくば駅下車
 [JR常磐線] 土浦駅・荒川沖駅・ひたち野うしく駅下車
 [常磐高速バス つくば号 (東京駅八重洲南口発)]
 つくばセンター下車

《各駅からバスに乗り換え》
 筑波大学中央行・筑波大学循環(右回り)→「第一エリア前」
 筑波大学循環(左回り)→「大学公園」
 ※ できるだけ公共交通機関をご利用ください。